

はなし抄

その地域で昨年、熊本地震

私が理事長を務める認定NPO法人「NEXTSTEP」(ネクステップ)は、熊本市とその周辺約100万人ぐらゐの人口がある地域を対象に活動し、子ども専門の訪問看護ステーションやヘルパーサービス、重い障害のある子どもたちの通所支援施設などの事業を展開しています。

熊本の小児科医 島津 智之さん

(1月28日、「病院木質化プロジェクト」が札幌市立大で開いた報告会の基調講演より)



しまづ・ともゆき 福岡県生まれ。熊本大医学部卒。在学中の2000年に任意団体NEXTSTEPを立ち上げ、09年のNPO法人化で理事長に。小児科医として熊本県内の病院に勤務しながら障害児や不登校児の支援などを行う。著書に「スマイル 生まれてきてくれてありがとう」。40歳。

医療が支えとなり、障害ある子どもに遊び学ぶ場を

が発生しました。災害が起きると、私がかかわっているような障害のある子どもたちは最も弱い立場に置かれます。重い障害のある子どもにとっては、電気やガス、水道といった社会的なライフラインの停止は生命にかかわります。電源を確保できないと電気でも動く医療機器を使う子ども

もは生きられませんが、停電が続けば呼吸が止まってしまいかもしれないという恐怖の中で過ごすことになるのです。もちろん地域には障害のある子どもだけでなく、介護の必要な高齢者もいるし、さまざまな困難を抱える人がいます。災害というのは弱い立場の人たちをさらに弱い立場になり、教育どころではなく

なってしまう。医療がしっかりと土台を支えた上で、子ども遊びや学びの場を保障することが大事です。子どもが子どもたちの世界の中で子どもらしく育っていく。そうした環境を保障するのが私たちの役割だと考えています。

も、とつても輝いているんだよ」ということを皆さんに伝えたくて、「ななちゃん」という女の子の話をします。

ななちゃんのお兄ちゃんもとてもすてきな子どもで、「僕には指が5本しかないのに、ななちゃんには6本ある。僕の指も増やしてほしい」と言っていました。飼っている犬を病院に連れて行った時は「お母さん、犬のお医者さんは犬だったか?」と聞いたそうです。「だって犬の気持ちは犬にしか分からないでしょ」と。そんな家族に囲まれて、ななちゃんは昨年10月に6歳の誕生日を迎えました。来年は小学1年生になります。

地域に開かれた施設にすることも重要です。昨年の八口ウィーンではみんなで仮装して地域のお年寄りの家を回って交流しました。おばあちゃんたちが特にノリノリで「来年は早めに言ってくれたら私たちも仮装するから」と言ってくれました。そうした形で地域に溶け込める施設というのが大事だと思っています。重い障害のある子どもたち

院で1歳の誕生日を迎えました。すると家族は、おうちへ連れて帰ってあげたいと思いはじめました。私たちがその手伝いをしました。おうちでは表情がどんどん豊かになって、かつては泣いただけで呼吸が止まったりしたような身体が、どんどん強くなっています。2歳の誕生日には初めて、病院とおうち以外の場所にも外出しました。

近年は医療機器が進歩して在宅医療を支援する仕組みも整いつつあります。重い障害のある子どもを自宅で育てようという若いお父さん、お母さんもたくさんいます。私は多様な子どもたちとかかわる中で、こちらが支えているつもりが、実際は支えられていると気づくことがよくあります。(構成・関口裕士)

道央ワイド